

学級経営への効果的な支援の在り方

－Q-Uの結果を生かした支援を中心として－

谷川 雄 司

福井県教育研究所では、平成22年度から3か年の計画で「学校支援のための訪問研修ユニットの開発と活用の研究」を協働研究のテーマとして進めている。学校現場においては、多忙化に伴い教員が研修講座を受講する機会を得にくいことから、要請研修の需要が高まっている。教育相談課においても要請研修の件数が近年増加傾向にあり、特にQ-Uに関する研修の要請が群を抜いている。

Q-Uに関する要請研修は、そのほとんどが概論を含む事例検討会である。事例に挙がる学級に関わる教職員全てが話し合いをすることで、教員間の同僚性が高まるとともに、その後の担任の学級経営への一助となっている。

本研究は、スーパーバイズを含めたショートプログラム(山本 2011)による事例検討会の後、短学活、道徳、学級活動の時間に短時間でも気軽に取り組める学級活動事例集を学級担任に提供することで、より良い学級経営への効果的な支援を目指すものである。研究協力員を依頼した学年、学校での事例検討会並びに学級活動を通して見えてきた成果や課題を報告する。

<キーワード> Q-U、要請研修、スーパーバイズ、事例検討会、学級活動事例集

I 主題設定の理由

1 不登校、暴力行為、いじめの現状から

平成23年に福井県教育委員会より出された「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査結果の状況について」および「福井県教育振興基本計画」によれば、以下のような現状分析と課題が浮き彫りにされている。

県内の小・中学校における不登校児童生徒の発生状況は、ここ数年ほぼ横ばいで、高止まりの状況になっている。特に、中学校1年時には不登校が小学校6年時の2～3倍へと急増（いわゆる「中1ギャップ」）する傾向があり（平成23年3月中学校卒業生）、また、中学校の各学年で100人程度ずつ新たな不登校が生まれている（図1）。県内の小・中学校における暴力行為の発生件数（表1）、いじめの認知件数（表2）は平成19年度以降減少しているが、県の教育相談機関への相談件数は依然として多いことから、引き続きアンケート調査や個別面談等を重ねるなど、常に子どものサインを見逃さない体制を整え、一つ一つの事例に適切に対応していく必要がある。（谷川要約）

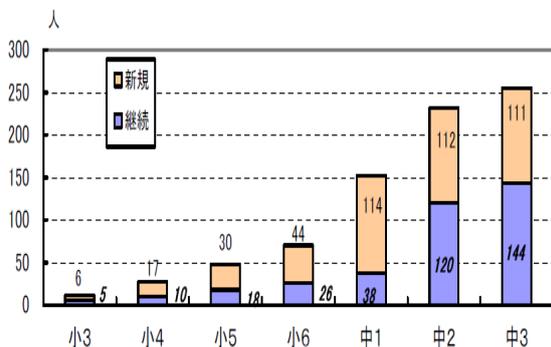


図1 平成23年3月中学卒業生の学年別の不登校の状況 (福井県：公立小中学校)

表1 暴力行為の発生件数 (千人当たり) の推移 (福井県・全国：国公立学校)

	(単位:件/千人)				
	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
福井県	0.7	0.9	0.8	0.8	0.8
全国	3.1	3.7	4.2	4.3	4.4

表2 いじめの認知件数 (千人当たり) の推移 (福井県・全国：国公立学校)

	(単位:件/千人)				
	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
福井県	36.2	21.9	16.2	9.4	8.1
全国	8.7	7.1	6.0	5.1	5.6

2 楽しい学校生活を送るためのアンケート(Q-U)検査の有効性から

児童・生徒理解は教師が子どもと関わる中で、日常の中での観察や言葉かけなどの面接法や観察法が中心であるが、「心の状態」は目に見えないものである。学級の中で観察される行動だけでなく、子どもが内面でどのように感じているかを理解するための一つの方法として、「楽しい学校生活を送るためのアンケート(Q-U)」検査がある。Q-U検査を実施することで、不登校になる可能性の高い子ども、いじめを受けている可能性の高い子ども、意欲的に学校・学級生活を送れていない子どもの早期発見や学級崩壊に至る可能性のチェックに役立つ。以上の理由から、Q-Uは全国の小中高等学校の児童・生徒230万人に活用され、信頼性と妥当性が認められている。

3 Q-U検査に関するアンケート結果から

今年度の教職員研修講座において、Q-U検査およびQ-Uによる校内事例検討会の実施状況、Q-U検査の実施に対する意見等について県内小中高等学校の教職員にアンケート調査を行ったところ、78校より回答が得られ、その結果は以下ようになった。

Q-U検査の実施状況について、最も多かったのが「2年以上前から実施している」の43校(55%)である。「今年度から実施」6校(7%)、「前年度から実施」5校(6%)も含めると、全体で7割近くの学校がQ-U検査を実施していることが分かった(図2)。

前項でQ-U検査を実施している54校にQ-Uによる事例検討会の実施状況を尋ねたところ、「学校以外からスーパーバイズ(以下SVと記す)を依頼して事例検討会を実施している」が13校(24%)、「勤務校の教員がSVをして事例検討会を実施している」が12校(22%)、「SVなしで事例検討会を実施している」が17校(32%)という回答が得られ、何らかの形で事例検討会を実施している学校が、Q-U検査を実施している学校全体の8割近くに上ることが分かった(図3)。

一方で、「Q-U検査を実施しているが、Q-Uによる事例検討会を実施していない」学校が12校(22%)あった。これらの学校ではQ-U検査の意義自体が十分理解されていなかったと考えられる。忙しい学校現場の現状の中で、Q-U検査を指標に不登校の未然防止に努めたり学級経営を充実したりするという取組みが、教員にプラスアルファの仕事として認識され、後回しにされることも多かったのではないだろうか。

来年度のQ-U検査の実施予定について、最も多かったのが「実施する予定である」という回答で48校(61%)に上り、単年度ではなく複数年度に渡ってQ-U検査を実施する学校が多いことが分かる。また、今年度Q-U検査を実施していない学校においても、その3分の1が「Q-U検査の実施について検討中である」と回答し、実施に前向きな姿勢が感じ取られる(図4)。

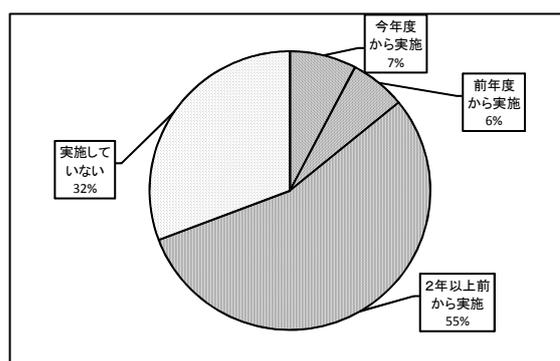


図2 Q-U検査の実施状況
n = 78 (県内小中高等学校)

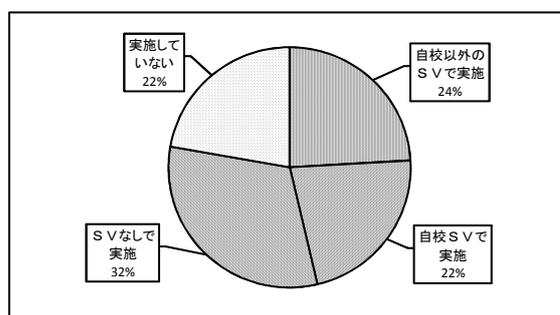


図3 Q-Uによる事例検討会の実施状況
n = 54 (県内小中高等学校)

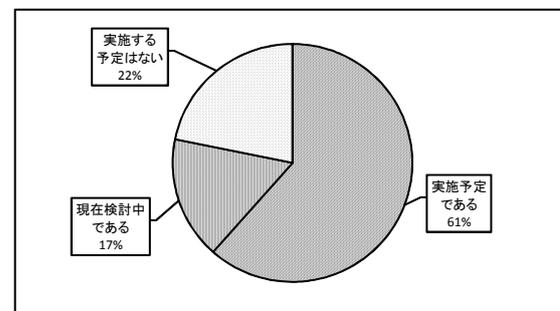


図4 来年度Q-U検査の実施予定
n = 78 (県内小中高等学校)

4 Q-U検査に関する意見から

前項のアンケート調査の自由記述においても、Q-U検査やQ-Uによる事例検討会の有効性を評価するものは大変多かった。しかしながら、傾聴すべき以下の意見があった。

- ・ Q-U検査を実施することで生徒の心の奥に潜んでいる思いを理解することができるため、実施することは必要であると思う。
- ・ Q-U検査を行うことにより、孤立児童を見つけたり、声かけしてあげると良い児童を発見できたりするので、行うとよいということはわかっているが、管理職をはじめ、多くの教員の理解と協力がないと実施することはできないと思う。
- ・ 2年前に一度全校で実施し、スーパーバイザーを招いて現職教育も行った。しかし、昨年、集金のこと、スーパーバイズのこと、学年の理解の違いなどでやめることになった。全校一斉にというのは大規模校では難しいのかと思う。
- ・ 年々検討会を開く時期が持たなくなっている。この状態で、(検討会を開けない状態で) Q-Uだけを実施する価値があるのか疑問を感じる。
- ・ 現在はスーパーバイズは実施していないが、スーパーバイザーを招いて研修を行えば、より効果的に生徒の支援に生かせると思う。(原文どおり、以下同じ)

これらの感想から、教員はQ-U検査を実施する意義については理解しているが、実施に至るまでにいくつかの条件をクリアしないと実施に踏み切れなかったり、Q-U検査を実施しても、その結果をどう学級経営へ生かしていくのか分からなかったりしているといった現状がうかがえる。

Q-U検査を実施しただけでその後の活用がない学校や、Q-U検査に関する事例検討会を行ってもその後の活用が個人に任せられたままチーム支援的発展につながらない学校も少なくない。やはり、学級担任の苦勞をねぎらい、児童生徒の実態把握を適切に行い、仮説に基づく具体的対応策を設定し実行することが必要となる。より良い学級経営のためには、Q-U検査に関する専門的なSVがあり、和やかに事例検討会ができる関係が教師集団の中に育つことが望ましい。

以上の点から、SVを含めたQ-Uの事例検討会を行うことで教員同士の同僚性を高め、その後の学級経営に生かす学級活動事例集を提供することが学級担任への援助になるのではないかと考えて本研究主題を設定した。

II 研究の目的

担任教師の学級経営方針・対応の仕方と、個々の生徒たちの特性・環境としての学級集団の状態との関係性を見極め、問題解決志向で分析する。事例検討会でスーパーバイズを含めた同僚教師からの提案をふまえて、担任教師がより具体的・効果的に学級経営ができるような手立てを提案する。

III 研究の方法

平成23年度前期に研究協力員に自学級のQ-U検査を実施、事例提供者報告書の作成を依頼する。その報告書を基に教育相談課でSVを行い、研究協力員の学校での事例検討会に参加して助言をする。学級経営に有効な手段(スクールソーシャルスキルトレーニング、ストレスマネジメントプログラム、アサーショントレーニング、構成的グループエンカウンターなど)を提供し、研究協力員の学級経営に活用してもらう。平成23年度後期に再度Q-U検査を実施し、今後の支援の在り方を考察する。

IV 研究の内容

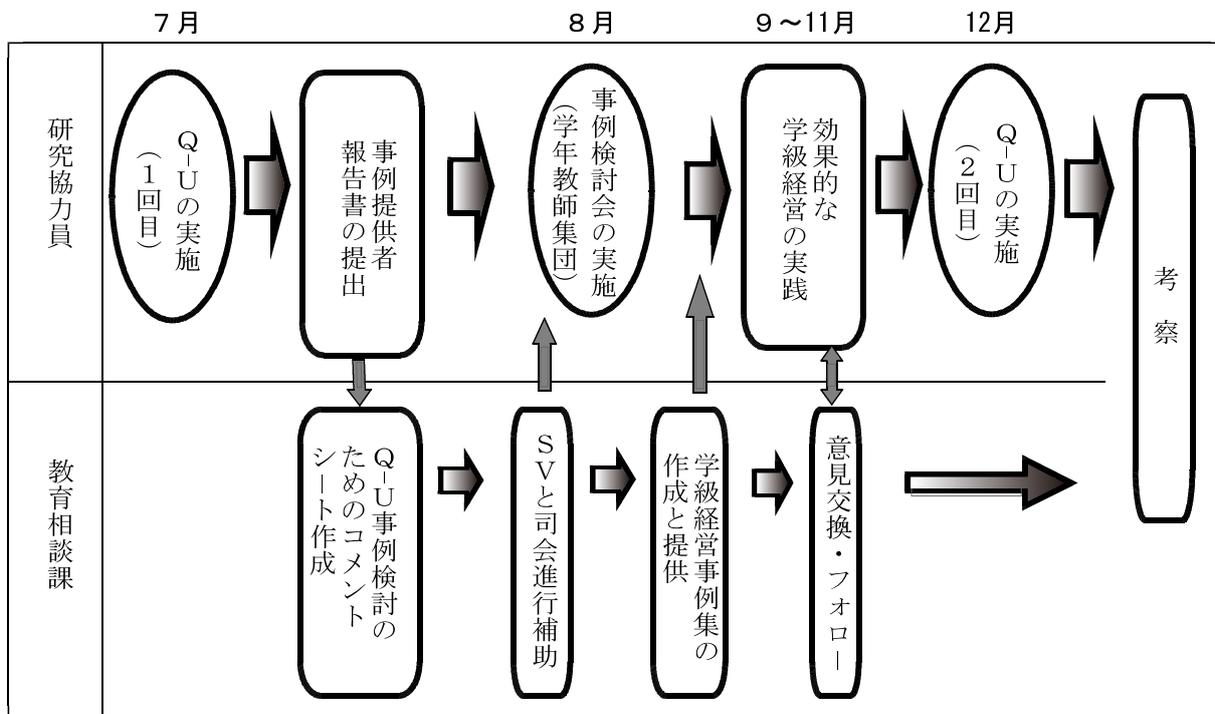
1 研究対象学級

福井県内中学校2年生

a学級(男子15名 女子14名 計29名)

- b学級 (男子15名 女子14名 計29名)
- c学級 (男子15名 女子14名 計29名)
- d学級 (男子16名 女子13名 計29名)
- e学級 (男子16名 女子13名 計29名)

2 研究の流れ



3 研究の実際

(1) 第1回Q-U検査の実施と分析

7月上旬に2年生のa~e学級においてQ-U検査が行われた。コンピュータ分析の結果とそれに基づく事例提供者報告書の提出を依頼した。

次に、研究の実際例としてd学級を取り上げる(図5~11)。

図5は、「学校生活意欲総合点の分布」である。男女別を改めて意識化できるように手を加えることで、学級内の様子をより細かく分析することができる(図8も同様)。特に女子は平均より高めに多く分布しており、学校生活を有意義に送っている生徒が多いことが分かる。

図6は、「学校生活意欲プロフィール」のグラフである。「友人との関係」「学級との関係」は全国幅の上限を上回っている。残りの三つの小項目も全国値の幅の中に収まっていることから、学級全体としては良好な状態にあると言えよう。

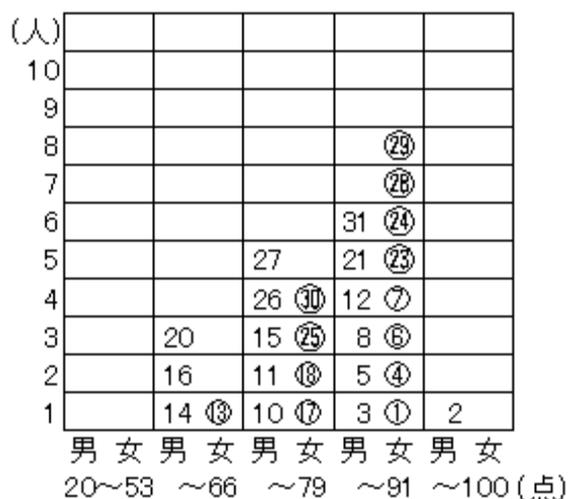


図5 学級生活意欲総合点の分布

図7は、「学級満足度尺度結果のまとめ」の分布図である。学級生活満足群に入っている生徒は15人(54%)で全国平均の35%を上回っているが、非承認群に入っている生徒も7人(25%)で全国平均の15%を上回っている。学級生活不満足群に入っている生徒は2人(7%) [全国33%]、侵害行為認知群に入っている生徒は4人(14%) [全国17%] とともに全国平均を下回っている。コンピュータ診断によると、被侵害感得点は全体的に低く、学級内に大きなトラブルは少ないようで学級のルールや行動規範がほとんどの生徒たちに共有されていると考えられる。しかし、承認得点には差が見られ、学級内で認められていて、意欲的に活動できている生徒と、そうでない生徒とが明確に分かれていると考えられる。

図8は、「学校生活意欲(領域別)の結果」である。「友人との関係」「学習意欲」「学級との関係」の三つの側面から学級の状況を把握することができるようになっている。「学習意欲」では男子の方が、「学級との関係」では女子の方が意欲が高いことが分かる。

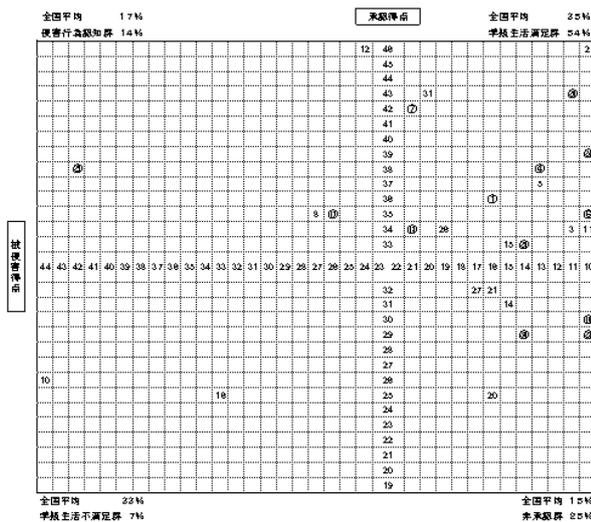


図7 学級満足度尺度結果のまとめ

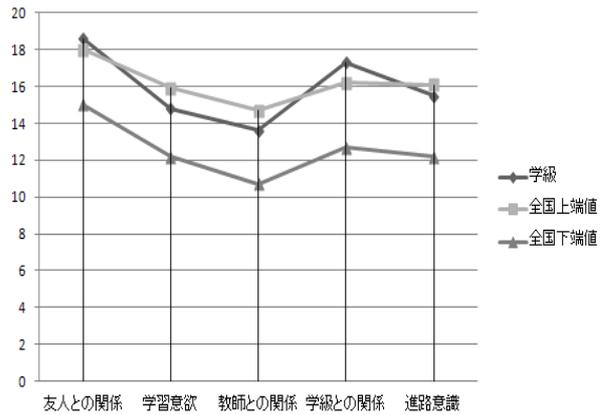


図6 学校生活意欲プロフィール

友人との関係			学習意欲			学級との関係		
		26 (30)						30
		21 (24)		31 (30)	27			24
		14 (26)		26 (24)	21			31 (25)
		12 (25)		20 (17)	14			27 (23)
		31 (17)		15 (12)	12			15 (26)
		11 (24)		20 (15)	10			21 (26)
		5 (23)		11 (16)	10			20 (16)
		20 (13)		25 (11)	8			11 (18)
		3 (6)		10 (5)	4			8 (7)
		8 (1)		16 (3)	2			3 (4)
		2 (4)		2 (23)				2 (1)
男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女	男女
低	中	高	低	中	高	低	中	高

図8 学校生活意欲(領域別)の結果

(2) 事例提供者報告書の提出と分析

図9は、「事例提供者の報告書」である。コンピュータ診断の場合、学級担任はQ-U結果のまとめ、Q-U学校生活意欲プロフィール等の資料と、普段の学級経営で感じ取っていることとを照らし合わせて事例提供者報告書を作成する。その際、次の6点に気を付けて記入する。

- ① 学級経営方針と日々の授業の進め方
- ② 4群の子どもたちをどう見ているのか
- ③ 学級内のリーダーと孤立している子ども
- ④ 学級内の小グループの実態
- ⑤ プロットされている位置が理解できない子ども
- ⑥ 学級担任が学級の問題と考えていること

この報告書もSVをまとめるための有益な資料となる。

図10は、そのSVをまとめたコメントシートである。教育相談課では、要請研修でQ-Uによる事

例検討会を実施するにあたり、図5～9を参考に、担任教師の性別、年齢、担任教師の学級への関わり、生徒の発達段階を考慮し、アドラー心理学の見地から担任や生徒を勇気づけるSVを行う。

事例提供者(担任教師など)の報告	
担任:20歳代女性 (7月)	(2)年(d)組
学級集団の背景: 中学校2年 人数29人: 男子16人(~ 番) 女子13人(~ 番) ・学校の特徴: 郊外の中規模中学校 ・学級編成の状況(持ち上がり等): 1学年5クラス。校区の小学校は3校。2年進級時にクラス替え有り。	
<問題と感していること> ・まじめな女子が多く、授業と休みの時間の区別がしっかりしている。 ・集中力が続かない男子生徒がいる。	
<学級の公的なリーダーの生徒(番号と簡単な説明)> ・女子バスケットボール部に所属。熱心に取り組んでいる。非常にまじめに何事にも取り組む。ムードメーカーでもある。 ・田舎に所属。真っ直ぐな性格で曲がったことが無い。部長としても前に立って頑張ろうとしている。	
<学級で影響力の大きい陰で仕切るような生徒(番号と簡単な説明)> ・	
<態度や行動が気になる生徒(番号と簡単な説明)> ・団体的に学力も低くおとなしい性格のため、特に男子からかわれやすい。 ・同僚クラスの女子から嫌なことを言われたとの野えがあった。 ・言葉遣いがきつくて、時々相手に対して攻撃的な態度に出ることもあった。	
<プロットの位置が教師の日常観察からは疑問に感じる生徒(番号と簡単な説明)> ・	
<学級内の小グループを形成する生徒(番号と簡単な説明)> ・女子特有のグループ。クラスの雰囲気を変えずにはない。 ・毎日授業中私語が多い時がある。	
<4群にプロットされた生徒に共通する特徴> 清足様・・・和やかで比較的まじめに頑張るグループ(何事にも)。 非承認様・・・まじめに頑張っているが、学級の中に入っていない。 悪言行為認識様・・・友人関係で問題を生じがちなグループ 不満足様・・・人にかかわれやすいタイプ。	
<担任の方針> 学級運営・・・お互い良い点を見つけて伸ばし、認め合うことのできる学級。 授業の展開・・・学力が低い生徒でも理解ができるわかりやすい学級。	

図9 事例提供者の報告書

<プロット図から浮かぶクラスイメージ> ・確かに少しかたさがあるクラスに見えますが、どちらかというと教師主導というより生徒たちの自主管理型のクラスに近いかもしれません。 ・女の子が割合とままとって、全体にお姉さんタイプの子たちがクラスを引っ張り、まじめな幼い男子がそれぞれのペースでついてきているという感じですが。
<ルールについて> ・ルールはほぼ安定しています。 ・男女のリーダーが割合難しく自分たちを見ているのではないのでしょうか。
<リレーションについて> ・女の子たちは先生をモデルにしてままとっている感じがします。 ・男子の子どもたちは逆に先生に認めてもらいたくて、それぞれのキャラクターを主張しようとしているところがありそうです。
<子どもたちがくじけているもの、勇気づけたいもの> ・全体に自己肯定感が低めですが、特に学習面での意欲が今ひとつという思いがあります。まじめな女子が多いので、おそらく自分に厳しくて自信が出てこないのかもしれません。
<先生がくじけているもの、勇気づけたいもの> ・先生も生徒も、もう少し自分に厳しくなるといいですね。ちょっと自分に厳しく頑張りが足りていないところもあるようです。十分よく頑張っていると思われそうです。

図10 Q-U事例検討のためのコメントシート

※河村茂雄(2005)『Q-U(楽しい学校生活を送るためのアンケート)』図書文化社より引用

(3) 事例検討会の実施(30分コース)

教育相談課では、要請研修で行われる事例検討会において、30分コースと45分コースの2パターンのショートプログラムを提供している。多忙な現場においては30分コースが採用されることが多く、研究協力員の学年でもこの方式が採用された。

事例検討会は、学校全体でQ-Uの概論を30分受講後、各学年に分かれ実施された。第2学年では学級担任(研究協力員)、学年主任、副担任、教育相談担当教諭が集まり、5学級について2日間(1回目は8月上旬、2回目は8月下旬)に分けて実施された。



d学級においては以下のような事例検討会になった。初めにスーパーバイザー(教育相談課)よりSVを図10のように行った。事例検討会の具体的な内容は図12の通りである。

1. SV(プレコメント)・・・図10

2. 担任よりポジティブポイントを報告

●女子特有の人の目を気にしたり、グループをつくったりとかの様子は無い。誰にでも優しくして素直である。●まじめな女子がクラスを引っ張ってくれている。●男子は子どもっぽい。授業中でも前へ出てきて、元気がよい。●女子がまじめで頑張っているため、男子もつられて頑張っている。

3. ポジティブポイントについて質疑応答(補足)

●学級の雰囲気はおとなしい。●学習しようとする雰囲気があり、指導しやすい。●何事にもまじめで真剣に考え過ぎて、

かえて進路意識が低迷しているのではないか。

4. 担任よりネガティブポイントを報告

●女子はまじめだが、男子は子どもっぽく、男女で差が出てざわざわする。最近落ち着いているが... ●男子はやんちゃな子とおくの子との差がある。●男子のリーダーになれる子が少ない。●うるさい男子がいて、女子が学習に集中できない。

5. ネガティブポイントについて質疑応答 (補足)

●配慮が必要な男子がいるが、周りも嫌という感じでは見ていない。●目立つ子が少ないので落ち着きが出ている。●一斉指導はしやすい。●流されやすい。(個性が強くないので、だらっとするとそういう雰囲気になるのではないか。)

6. ネガティブポイントについてリフレーミングコメントを考える。(補足)

うるさい男子→活発、明るい 流されやすい→臨機応変に対応できる 全体的におとなしい→みんながリーダーになれる

7. コメントグルーピング

8. サジェストコメント (クラスをさらに良くしていく手立て・方法)

●男子の活躍の場を保障する。●女子にねぎらいの言葉を贈る。●担任自身が変わる。

9. コメントグルーピング

10. ネーミング

11. 司会者によるまとめ

12. 担任からのコメントと意思表明

M=まとめ、K=個性、O=おおらか、というネーミングをいただいたので、この三拍子がそろったクラスにしていきたい。まだまだ、力を出せる子が多いと思うので、個性や良い面を出せるように援助していきたい。

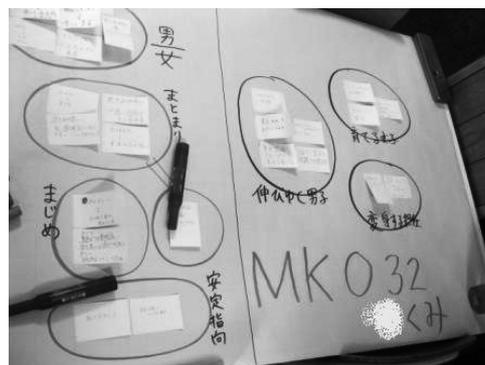


図11 コメントグルーピング

図12 ショートプログラム(30分コース)の実際

ショートプログラムでの事例検討会(a~e学級)について、アンケート調査をした。主な意見や感想は次のとおりである。

- ・ゆっくり話ができてよかったです。
- ・おもしろかったです。
- ・学級経営をがんばっていかうと思いました。
- ・自分のクラスを他の先生に見ていただく良い機会でした。また、講師の先生に分析もしていただき、クラス模様が改めて分かりよかったです。
- ・最初は毎年やらなくてもいいと思っていましたが、今年はプログラムをくんで、より筋道の通ったやり方でとても勉強になりました。ただし、専門用語も多いので、Q-U概論で基礎知識のレクチャーがあつてありがたかったです。
- ・事例を出してくれた先生の、担任としてのお考えや躰に対する思いをお伺いし、大変参考になりました。
- ・学年による検討だけでなく、そのクラスに入っている教科担任グループでの検討会ではどうでしょうか。

(4) 効果的な学級経営の実践

前出図12のようなSVを含む事例検討会を行って、そこで得たヒントをもとに各教師が学級経営を有効にすすめていく。そこで、本研究では事例検討会後の有効な学級経営に資するための学級活動事例集を作成した。

内容は、短時間で気軽に利用できるもの、生徒の発達段階、実施時期を考慮し、構成的グループエンカウンター、リラクゼーション、ソーシャルスキルトレーニング、アサーショントレーニングの4領域37活動にした(表3)。

表3 学級活動事例集の内容

領域	ねらい	活動名		
エンカウ ンター 構成的	・リレーションづくり ・ルールの確立 ・自己理解 ・他者理解 ・役割遂行 ・自己受容	アドジャン	1分間スピーチタイム	指立てドン
		質問ジャンケン	新聞ジグソーパズル	好きなもの・好きなこと
		先生とビンゴ	そうですね	出合いのビンゴ
		マインドタイム	番町皿屋敷	ねことねずみ
リラク ゼーション	・心身の健康の回復、維持、増進を図る ・自己抑制力や物事の取組みにおける集中力、持続力を高める	10秒呼吸法	自律訓練法	漸進性弛緩法
		動作法	さわやかイメージ法	
ソシ ヤリス キ ル	・人間関係に関する事で、何らかの不都合が生じた時に、その状態を改善する ・集団において不適応状態にならないように、一人ひとりの特性を考えて行う ・人と関わる力をより向上させる	意見の対立解決講座	こっそりちょっとボラソチア	ちょっと待った! そのけんか
		話し合いテクニック講座	友情を壊さない 断り方	困っているときのお願いの仕方
		一生懸命やった失敗は許すが勝ち!	ちょっと大人の励まし上手、奇り添い上手	何かを頼むときのちょっと大人の心得
		ハードな怒りをソフトに変身	ちょっと大人の誘い上手	わからないことがあるときの聞き方
トア サイ ニ ョ ン グ	・自分と相手、お互いのアサーティブ権(人権)を尊重した上で、自分の意見や気持ちをもその場にふさわしく表現出来るようにする	自分も相手も大切に表現-三つの表現とは-	アサーティブな考え方をしてみよう!	アサーティブな表現を身につけよう!
		私のよいところ、あなたのよいところ	アサーション権とは?	

実施時期は9月から11月で、事例を8月下旬に学級担任に提供した。事例の内容は、日々の活動が忙しい学校現場において、短学活(朝の会、帰りの会)や授業の一部(各教科、道徳、学級活動など)に気軽に実践できそうなものにした。

学級担任は、事例検討会での他の教員からのアイデアと学級の実態を基に、その学級にあった活動を選んだり、自分の学級で必要なものにアレンジしたりして実践をした(表4-1、4-2)。

なお、これまで学年の平均的な例として取り上げてきたd学級に加え、ここでは特に顕著な有意差が見られたa学級も併せて提示する。

表4-1 学級活動の実践(a学級)

a組	学級活動記録				
	実施日	活動時間	活動内容	生徒の様子	先生の感想
第1回	9/8	帰りの会	エンカウンター「先生とジャンケン」	楽しそうにやっていた	なかなか良い手応えだった
第2回	9/26	学活(後半)	エンカウンター「出合いのビンゴ」	楽しそうにやっていた	なかなか良い手応えだった
第3回	10/4	道徳(前半)	エンカウンター「新聞ジグソーパズル」	楽しそうにやっていた	なかなか良い手応えだった
第4回	10/20	学活(前半)	エンカウンター「そうですね」	少し身構えてやっていた	なかなか良い手応えだった
第5回	11/1	学活(前半)	「アピールスピーチ」	自分の係に対する思いを話した	笑えた!
第6回	11/15	道徳(前半)	「笑わないこと」	楽しんでいた	笑えた!
第7回	11/22	道徳	「私の宝物」	よく考えていた	反応は今ひとつだった
第8回	11/29	道徳	「私の宝物」発表	楽しみながらも真剣に語り、聞いた	大好評だった
毎日(帰りの会)		帰りの会の最後	日直のスピーチ	スピーチの内容で拍手が変化する	自信のない生徒が分かる(気づく)

【担任の留意点】

- ・グループエンカウンターでの活動回数を増やした。
- ・クラス内で、一人ひとりに話をさせる機会を増やした。

【生徒の変容】

- ・元気に発言する生徒が増えた。
- ・全体が仲良しになった。
- ・ルールに対して守ろうとする意識が高まった。

表4-2 学級活動の実践（d学級）

d組	学級活動記録		活動内容	生徒の様子	先生の感想
	実施日	活動時間			
第1回	9/13	道徳	エンカウンター 「出会いのビンゴ」	少し男女間で照れがあった	同性同士でビンゴすることが多いので男女間のゲームを取り入れたい
第2回	9/26	教科	文章作り 「早押し対決」	男女グループで協力してできていた	1グループ5人(男女)で思った以上に楽しんで行っていた
第3回	10/4	道徳	エンカウンター 「新聞文字さがしゲーム」	男女とも真摯に行い、また文字カウントも協力してできた	良かった
第4回	10/20	道徳	エンカウンター 「テレビショージャンケン」	楽しんでできた	良かった
第5回	10/27	給食	エンカウンター 「テレビショージャンケン」	(特に男子が)楽しんでできた	良かった
第6回	11/8	教科	スキット作り 「役になりきろう」	男女ともそれぞれ配役になりきり、興れもあったが楽しんで練習に取り組めた	次は更におもしろいものが作れたらいいと思う
第7回	11/17	道徳	他者理解 「無人島脱出」	男女グループで行ったが和気あいあいと行うことができた	時間が足りなくなった為配分をしっかりとしたい
第8回	11/29	道徳	他者理解 「OOさんへHappy Letter」	クラスのことを考えながらコメントを書いていて大変良い雰囲気だった	よかった
毎日(帰りの会)	帰りの会の最後		日直の3文スピーチ	人の前で話すということもあり壁さもある	聞く側の姿勢も指導していきたい

【担任の留意点】

- ・ペア活動やグループ活動を多く取り入れた。
- ・昼食時や休み時間等生徒と話す機会を増やした。

【生徒の変容】

- ・進んで仕事をするようになった。
- ・男女グループにしても嫌がらなくなった。
- ・男女が楽しそうに会話するのを見るようになった。

(5) 第2回Q-U検査の実施と分析

① a学級

図13-1、14-1は、Q-U学級満足度尺度のプロット図である。12月では、2名が学級生活不満足群に属しているものの、その他のほとんどが満足群に属しており、満足群準型を示している。縦型の教師主導の学級集団から満足型の学級集団へ移行したものと思われる。

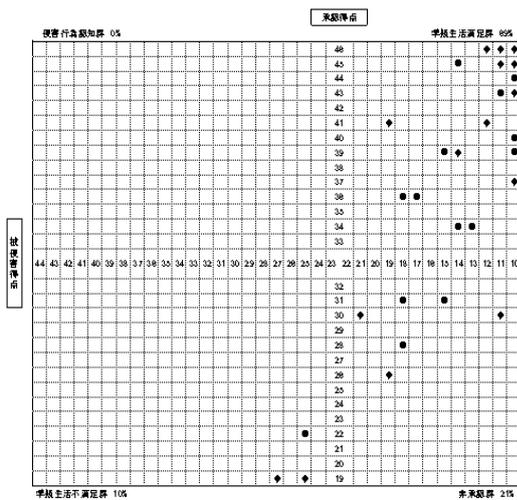


図13-1 7月のプロット（a学級）

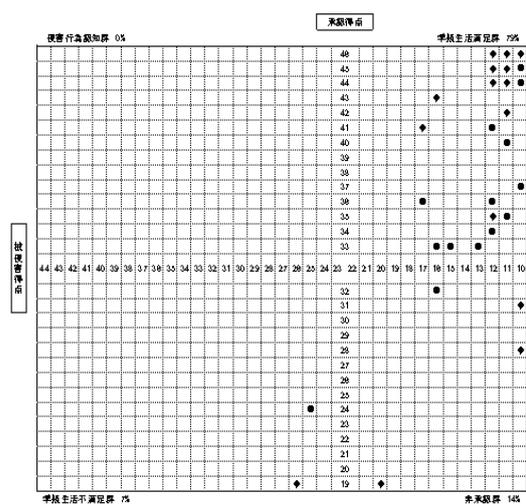


図14-1 12月のプロット（a学級）

図15-1は、Q-U学級満足度尺度による4群の推移を示したものである。満足群が69%から79%へと増加し、非承認群が21%から14%へ、不満足群が10%から7%へと減少している。侵害行為認知群は共に0%で変化がなかった。学級生活満足群の割合が全国平均の2倍以上の割合になっていることから、学級集団がより安定した状態になっていることが考えられる。

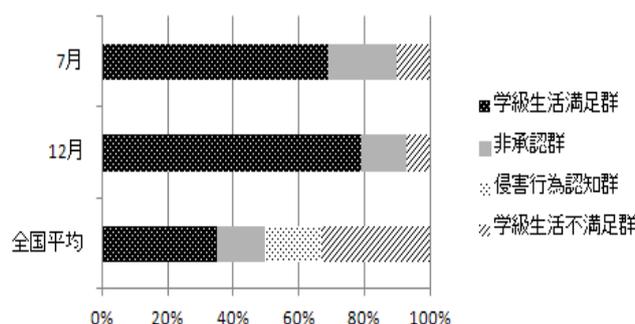


図15-1 学級満足度尺度による4群の推移 (a学級)

図16-1は、Q-U学級満足度尺度による承認感得点と被侵害感得点の学級平均値の推移を示したものである。承認感得点の学級平均値は36.4点から37.5点へと上昇し、被侵害感得点の学級平均値は14.8点から13.4点へ減少した。7月と12月の得点について、統計的に比較を行ったところ (t検定 表5、6)、1%水準で「被侵害感得点」の低下に有意な傾向が見られた (被侵害感: 7月>12月)。他の学級では有意差は見られなかった。

図17-1は、学校生活意欲尺度得点の学級平均値の比較を示したものである。教師との関係が13.6点から14.3点へ、学級との関係が16.0点から16.8点へと上昇した。その他の項目は目立った変化が見られなかった。

以上の結果から、a学級は毎日の帰りの会でのスピーチ活動を含む学級活動の取組みが生徒の承認感を高め、生徒と学級集団の関係、生徒と教師との関係もより深まり、成熟した学級集団に移行したと考えられよう。

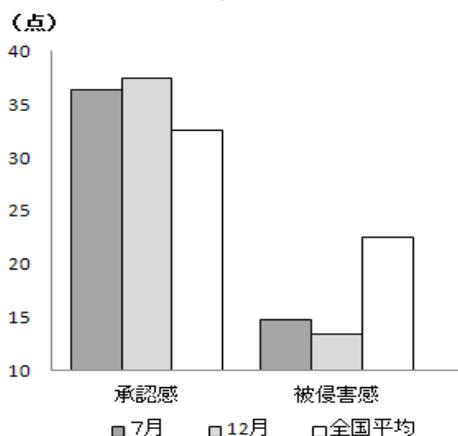


図16-1 承認感得点と被侵害感得点の学級平均値と全国平均値の比較 (a学級)

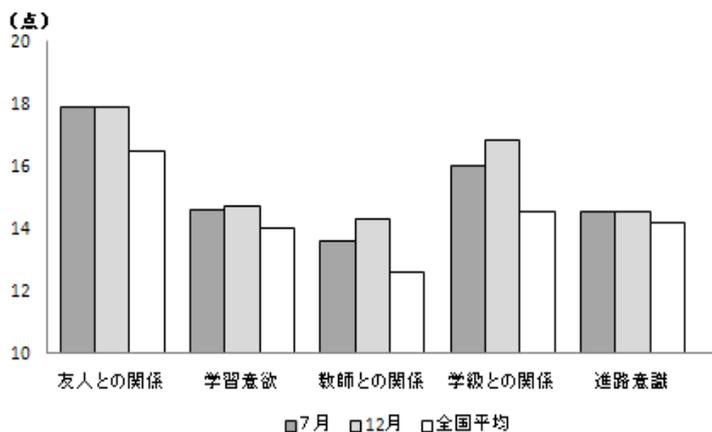


図17-1 学校生活意欲尺度得点の学級平均値と全国平均値の比較 (a学級)

表5 Q-U得点の比較 (a学級)

Q-U	7月	12月	t値	有意差
承認得点	36.38 (8.65)	37.45 (8.77)	0.2087332	n.s. 有意ではない
被侵害得点	14.79 (5.04)	13.41 (4.22)	0.0065262	** 有意である

()内は標準偏差

表6 t検定の出現確率等参考図

出現確率	有意水準	記載上の表現	記載記号
.10<P	-	有意ではない	n.s.
.05<P<.10	-	有意傾向である	↑
P<.05	5%	有意である	*
P<.01	1%	有意である	**

② d学級

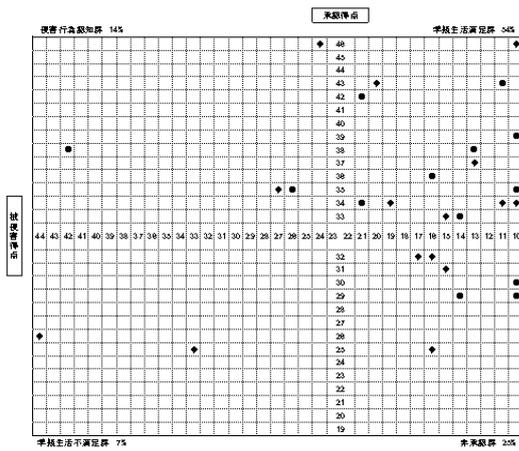


図13-2 7月のプロット (d学級)

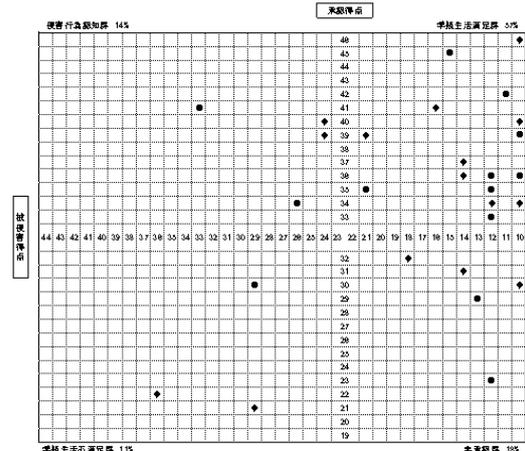


図14-2 12月のプロット (d学級)

プロット図を比較したところ、4名が非承認群から満足群へ、1名が満足群から非承認群に移動していることが分かった。全体として生徒たちの自主管理型の学級であると考えられる。

4群の推移では、非承認群は25%から18%へ減少している。その他の群は目立った変化は見られない (図13-2、14-2、15-2)。

承認感得点と被侵害感得点の学級平均値の比較では、承認感得点の学級平均値はともに35.0点と変わっていないが、被侵害感得点の学級平均値は18.4点から17.1点に減少した。学校生活意欲尺度得点の学級平均値の比較では、学級との関係が16.3点から17.0点と増加し、全国平均をかなり上回っている。その他の項目はやや減少傾向にあるが全国平均を上回っている (図16-2、17-2)。

以上の結果から、d学級は数値上では有意差は見られなかったが、毎日の帰りの会での活動を含む学級活動の取組みが学級に良い変化をもたらしたと考えられる。

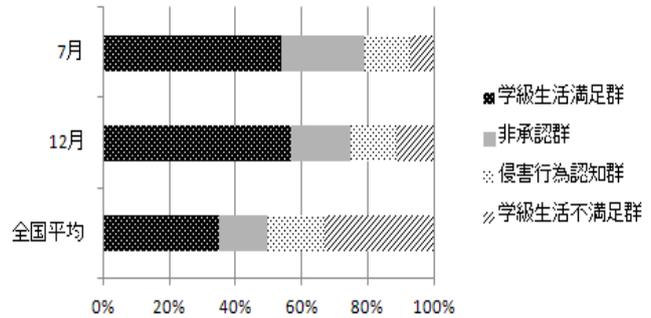


図15-2 学級満足度尺度による4群の推移 (d学級)

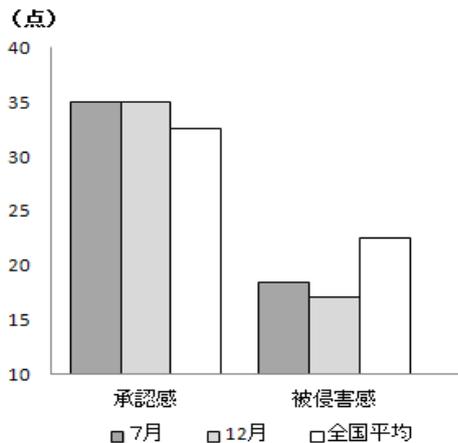


図16-2 承認感得点と被侵害感得点の学級平均値と全国平均値の比較 (d学級)

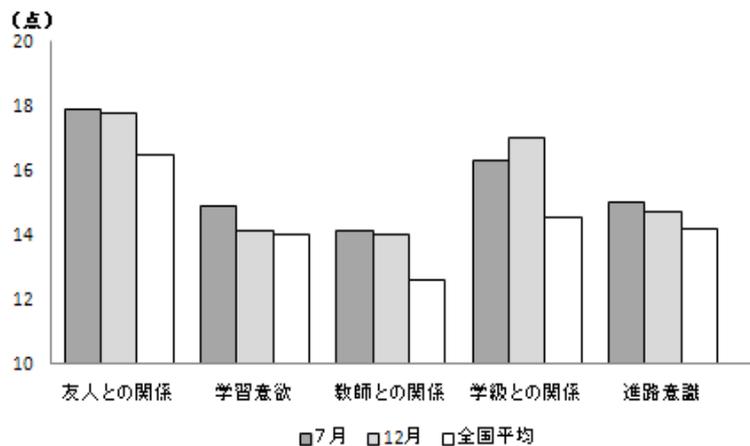


図17-2 学校生活意欲尺度得点の学級平均値と全国平均値の比較 (d学級)

③ Q-U検査の自由記述から(全学級)

Q-Uアンケート用紙の最後に、「楽しいと思うこと」「いごちのよい場所」「思っていること・考えていること」について自由に記述する欄がある。楽しいと思うことが「友人と話すこと」という記述が学年全体で56名おり、本調査の「友人との関係」の得点平均値が全クラスとも全国平均値よりも高くなっていることと関連があると考えられる。いごちのよい場所が「クラス」という記述が学年全体で44名おり、その中でも10名以上いる学級は、本調査の「学級との関係」の得点平均値も高いことが分かった。

「思っていること・考えていること」の自由記述の中で、学級や友人関係についての記述の一部を以下に紹介する。

- ・友達関係をもっと深めたい。
- ・欠席ゼロで全員教室にきてほしい。
- ・みんな一人ひとりががんばれるクラスにしたい。
- ・みんな明るくクラスを盛り上げられるようにしたい。
- ・楽しい、明るい、平和、仲よしのようなクラスにしたい！
- ・しっかりするときはしっかりし、楽しむときは楽しむクラスにしたい。
- ・みんなが楽しく、元気で笑顔いっぱい、明るいクラスにしたい。
- ・このクラスのメンバーのまま、3年生になっても修学旅行に行きたい。
- ・差別とか無い楽しいクラスにしたい。いつも笑いに包まれているクラスにしたい。
- ・みんなが3年生になるとき、このクラスのままがいいなあとか、すごく楽しかったなあと思えるようなクラスにしたい。

(6) 今後の学級経営へのS V

よりよい支援をするためには、RESEARCH(調査)→PLAN(計画)→DO(実践)→CHECK(考察)→ACTION(再試行)サイクルのそれぞれが十分に機能されなければならない。そこで、教育相談課では3学期の学級経営を実践する学級担任へのエールとして、各学級の変容を受けてのコメントシートを作成した(図18)。

<プロット図から浮かぶクラスイメージ>

・硬さの見た学級集団が、少しずつほぐれ、まとまりがつくようになってきた感じがします。思春期も本格的になり、自意識が出てきて互いへの関心も高まっているようです。

・勉強面は少し中だるみを感じられますが、今はクラスの安心感をつくりあうことを優先している過程としてとらえるとよいかもかもしれません。

<ルールについて>

・お互いを意識し合う活動によってルールもいっそう定着してきているように思われます。

<リレーションについて>

・女子がとても仲良くなってきているので、男子もそれなりにまとまりが出てきているように思います。男女の仲がよくなってきていることも、クラス意識の高まりにつながってゆくとされます。

<子どもがくじているもの、勇気づけたいもの>

・男子の学習意欲がかなり低下しているので、プライドをくすぐるようなやる気upにつながるような指導の工夫が今後必要になってきそうです。互いに未来を語り合う活動もいいかもしれません。

<先生がくじているもの、勇気づけたいもの>

・もともと大人しく控えめの子が多い感じのクラスなので、ひとつひとつ関係もほぐしながらすすめていくのがなかなか大変だと思われます。ゆっくりとした変化をすすめる集団だと思われますので、あせらないでこつこつ働きかけを！

図18 コメントシート(d学級)

V 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

今回の研究の目標は、Q-U事例検討会を行い学年教師集団の同僚性を高めるとともに、学級活動事例集を作成し、各学級担任への実践につなげ、その有効性を2回目のQ-U検査の実施によって検証することであった。

学年教師集団にアンケートをとったところ、次のような回答があった。

○学年主任、副担任の研究実践時の留意点と、取組みと実践後の気づきから
(留意点)

- ・廊下でのすれ違いざま、授業の前後、ランチの準備・片付け等に生徒に声をかけ、コミュニケーションに努めた。
- ・清掃時は無言清掃のため、いっしょに清掃をしながらコミュニケートした。
- ・プリント・ノートを集める時、持ってきた子に「ありがとう」を必ず言った。
- ・授業中にグループ活動を取り入れてみた。

(気づき)

- ・落ち着いて学習に取り組むようになった。
- ・笑顔の生徒が増えた。
- ・落ち着きのある生徒が増えてきた。

このことから、前年度、今年度と事例検討会を行うことにより情報やスキルの共有化を図り、協働して子どもたちと向き合っていくというモチベーションが高まっていったと考えられる。

研究協力員にアンケートをとったところ、次のような回答があった。

○研究実践後の担任の感想から（全学級）

- ・学級活動事例集を活用できて良かった。
- ・生徒の良い面がたくさん見られたのが良かった。
- ・多くの事例が（学級活動事例集に）掲載されているので、大変参考になった。
- ・いくつかの事例を参考にさせてもらった。
- ・クラスの状況によって、なかなかうまくいかないこともあり、工夫が必要だと思った。

「学級活動事例集」を提供することで、多忙な学級担任がすぐに実践することができたことが分かる。このことが、生徒の学級への所属感を高め、今後の生徒同士の人間関係をより円滑にするという点で役立つと考えられる。

2 今後の課題

(1) 同僚性向上の恒常化

学級集団を育てていくためには、教師も集団で育てていこうという意識が必要である。生徒理解のためだけでなく、教師集団がまとまっていくツールとしても、校内研修計画に事例検討会を組み込んでいくことが必要ではないか。

(2) 学級活動事例集の内容の充実

学級担任が手軽に短時間で、しかも継続して行えるような学級活動事例集を作成したが、今後さらに実践を深めていくためには、学級の実態に応じて有効な活動の組み合わせを提供できるように、より活用しやすい工夫が必要であると感じた。

(3) 継続して取り組むことの必要性

短い研究期間ではあったが、実践後のQ-U検査で良い結果が得られたことにより、今後も引き続き実践していけばさらに良い学級集団になっていくことが予想される。中学校2年生という多感な時期の学級経営は大変だが、「継続こそ力なり」である。

(4) スーパーバイズに代わるもの

よりよい学級集団にするために、事例検討会におけるスーパーバイザーは重要な意味を持つ。しかしながら、県内のスーパーバイザーの養成にも限界がある。各学校で事例検討会をやることによって、教師集団の同僚性が高まることから、事例検討会そのものが共同スーパービジョンとなることが将来

的に望ましい。そのために何ができるかが今後の課題である。

Q-U開発協力者の粕谷貴志は、「教育実践の工夫が、全国で地道に努力を重ねておられる先生方によって共有され、多くの学校現場で子供のためになる実践が展開されることを願っています。」(河村・粕谷 2007)と述べている。教育相談課のQ-Uに関する研修講座、並びにQ-Uに関する要請研修がその一翼を担っていると考え、今後も現場の教員が気軽に実践できるような学級経営の在り方を探っていききたい。

最後に、本研究の実施にあたり、アンケートに御協力くださいました研修講座並びに要請研修受講者の方々に厚くお礼を申し上げます。また、御多忙の中、多大な御協力を賜りました研究協力員をはじめ、教職員の方々に心から感謝申し上げます。

《引用文献》

- 福井県教育委員会(2011)『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査結果の状況について』p. 1
- 福井県教育委員会(2011)『福井県教育振興基本計画』資料編、pp. 12-13、第2章p. 6
- 河村茂雄(2005)『Q-U(楽しい学校生活を送るためのアンケート)』図書文化社
- 田中敏・山際勇一郎(1992)『新訂・ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』p. 39、p. 59
- 河村茂雄・粕谷貴志(2007)『公立学校の挑戦(中学校)』図書文化社、あとがき

《参考文献》

- 石川慎哉(2007)「学級における居心地のよさを高める積極的な生徒指導の研究—Q-Uを用いたコンサルテーションを軸に—」『研究紀要[2007. 3]E3-03』青森県総合学校教育センター
- 河村茂雄(2006)『学級づくりのためのQ-U入門「楽しい学校生活を送るためのアンケート」活用ガイド』図書文化社
- 河村茂雄(2007)『Q-U実施・解釈ハンドブック(中学・高校用)』図書文化社
- 河村茂雄(2007)『データが語る①学校の課題』図書文化社
- 河村茂雄(2007)『データが語る②子どもの実態』図書文化社
- 河村茂雄・粕谷貴志(2007)『公立学校の挑戦(中学校)「人間関係づくりで学力向上を実現する」』図書文化社
- 河村茂雄(2008)『Q-U式学級づくり(中学校)』図書文化社
- 河村茂雄(2010)『授業づくりのゼロ段階「Q-U式授業づくり入門」』図書文化社
- 河村茂雄(2011)『実証性のある校内研究の進め方・まとめ方「Q-Uを用いた実践研究ガイド」』図書文化社
- 河村茂雄他(2004)『Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド(中学校編)』図書文化社
- 河村茂雄他(2008)『いま子どもたちに育てたい学級ソーシャルスキル(中学校)』図書文化社
- 富山県総合教育センター(2010)『中学校アサーショントレーニングプログラム』
- 藤原忠雄(2006)『学校で使える5つのリラクゼーション技法』ほんの森出版
- 松下裕子(2011)『構成的グループエンカウンター要請訪問ユニット「エクササイズ集」』福井県教育研究所
- 山本紀子(2011)「学校支援のための訪問研修ユニットの開発と活用の研究—Q-U(事例検討会)ユニットを使用した学校訪問研修の取組みについて—」『研究紀要 第116号』福井県教育研究所